

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-10

「これに、もうひと手間かけます。仕上げをごろうじろ」と麻里子は言うが早いか、深めの皿にワタを抜いた鮎の塩焼きを入れて熱燗で浸した。

普段では見せたことがない麻里子のハシヤギ振りに、法被姿の女等は箸の手を休め、呆気にとられていた。

二つのどんぶりに炊きたてのご飯をよそうと、鮎の骨酒を注いだ麻里子は、「酒茶漬けを召し上がれ?」と勧めて、自分から先にサラサラとかわつくと、逡巡している真紀に向って、「美味、珍味、芳醇……さあ、どうぞ!」と自信たっぷりに勧める。

「どうぞ、冷めないうちに?」

賄い婦も自信ありげに進めるので、引っ込みがつかなくなった真紀は、エイヤーとばかりにサラサラとかわつた。

座っているだけでも存在感そのものからして妖美漂う女が、端無くも、不行儀をサラッとやってのけるのを目の当たりにした彼女らは、いい女は何をやっても様になることを思い知らされた。

「ひょっとして、女優さんですか?」

彼女らの中の一人が、思わず問い掛けたのを、味覚に気を取られてしまっている真紀に代わって、麻里子が、「残念でした。でも、ありがとう」とその場の空気を、すくい取って答えた。

酒茶漬けを行きつけだった『お多幸』の席で、おくびにも出さなかった男への訝しさもあって、「なぜなのかしら? わからないわ」

と昌幸を知る限りにおいて、とっくにこの食べ物についての能書きを並べていたはずだったから、真紀は男の妹に、疑問符だらけの眼差しで訴えかけた。

「医者嫌いだった兄が、どんな風の吹きまわしか、五十歳の区切りにと一泊ドッグを受けたら、肝硬変と診断されたのです。当然アルコール禁止令でしょう。ところが、お気に入りの酒茶漬けを、今後は一切口にしないかわりに、飲酒は続けてよい事にすると、勝手に独り決めしちゃったんです」

麻里子の返答に、賄い婦も笑って頷いた。

「今夜はどうしても作りたかったの、気に入ってくださったようで、ホッとしています。ひと口含んだだけで、顔をしかめる人も結構いるんですよ」と麻里子が続けるので、

「この感じ……間違いなくあの方らしいわ。なぜ黙っていたのかしら……ね～」

真紀は麻里子を通して、男に問いかけた。